多様な主体による田園景観の保全管理の試み

—埼玉県鶴ヶ島市高倉集落のふるさとづくりの事例—

A Study on Preservation and Management of Rural Landscape by Local Partnerships:
A Case Study of Takakura in Tsurugashima City, Saitama Prefecture

川 嶋 雅 章*

Msaaki KAWASHIMA

I はじめに

本稿は、都市近郊における「農」とのかかわりの中で創られ保たれてきた農村景観を、市民共有のふるさとの原風景として守り、更には現代の知恵を活かして、より美しく潤いのある環境創りを目指している¹⁾、埼玉県鶴ヶ島市の高倉集落の事例である。行政・地域住民・市民、NPO、企業等の多様な主体による田園景観の計画づくりと保全管理活動の報告である。

鶴ヶ島市は、埼玉県のほぼ中央で都心から約45kmの圏内に位置し、坂戸市、川越市、日高市に接している。また、荒川の支流である入間川と高麗川に囲まれた入間台地の北部先端に位置する。

人口は、2010年5月1日現在69,833人である。1980年から1985年にかけての人口増加率は37.8%で、人口増加率は県内1位、全国でも有数の人口増加都市であった。この急激な都市化の進展は、一方で農村の風景や緑を急速に消失させてきた。近年は、人口増加がほぼ沈静化し、1993年以降は、社会動態が減少に転じ、1995年頃からは人口規模は横ばいの状況にある。

鶴ヶ島市の高倉集落は、江戸期に開発された新田集落で市街化調整区域に指定されている。周辺の市街化区域内では土地区画整理事業も行われ都市的土地利用に変化しているが、貴重なふるさと景観が残されている。このため、高倉地区では、地元住民のふるさと高倉の農村景観を守り育てていきたいという思いから「高倉ふるさとづくりの会」が2000年に発足した。この会では、「高倉ふるさとづくり通信」の発行、先進地の視察、菜の花まつりや高倉ふるさとまつり等のイベント活動にも取り組んでいて、更に「高倉ふるさとづくり憲章」や「高倉ふるさとマップ」もつくるなど、様々な農村景観を守り育

表1 高倉集落のふるさとづくり経緯

Table 1 Process of Rural Development in Takakura

1990年	鶴ヶ島21どうする会発足
2000年	高倉ふるさと研究会発足
2002年	高倉ふるさとづくりの会 (自治会で承認された集落全戸参加の会)
	優良事例として農林水産大臣賞受賞 (豊かなむらづくり全国表彰事業)
2004年	鶴ヶ島市ふるさとの郷構想策定 (ふるさと構想策定委員会)
2006年	鶴ヶ島市高倉ふるさと散策路等市民会議
2007年	鶴ヶ島市高倉ふるさと水辺の整備市民会議
2008年	高倉ふるさと協議会発足

てる活動が行われている。これまでの活動に対して2002年度に「豊かなむらづくり全国表彰事業」の最優良事例として農林水産大臣賞を受賞している。

本論では、筆者が2004年の「鶴ヶ島市ふるさとの郷(むら)構想策定」からコーディネーターとして関わってきた、これまでの計画策定過程から田園景観の保全・管理に関する問題点と課題を整理し、都市近郊における保全管理のあり方について述べるものである。

II 高倉集落の概要

1 集落構造の特徴

高倉集落の形成は鶴ヶ島町史²⁾によれば、近世初期の絵図や文献に高倉村古屋敷とあり、近世中期以降に村の小川氏により散居型集落を計画的にまとめた村受新田として開発された。検地年代は不明であるが、元文4年(1739)には総家数が15戸で、文政年代(1818~29)に10戸とある。

集落構造は図1のように、中央に旧名主の家を配し、北東に日枝神社と旧長泉寺、南西に稲荷神社、旧高福寺を配置している。各戸は、屋敷林(裏山)+屋敷+ウチの

*明治大学理工学部 Lecturer, Dept. of Architecture, Faculty of Science & Technology, Univ. of Meiji, Dr. Eng.

Key Words: 1) 田園景観, 2) 保全管理, 3) 住民参加, 4) ワークショップ, 5) 武蔵野新田

畑+ソトの畑の武蔵野新田集落の短冊型地割りである。

この地帯は高麗川扇状地で、上流湧水帯に位置し、湧水による「おかねが井戸」が、入会地的性格を残した深い平地林の中にある。

池尻池は、不安定な湧水の安定化を図るために人工的な農業用のため池として作られたものである。

近世初頭の緑地は、照葉樹林と落葉広葉樹で、耕地が1/4、雑木（コナラ・アカマツ）が3/4であった。近世中後期には、薪炭林のコナラを主体とする雑木林が急増し、明治の初めには4割以上がコナラを主木とする雑木林であった。明治後半はアカマツ林、スギ、ヒノキが増大し、1955年以降の急激な開発により林地が激減し、雑木林も荒廃、近年はマツ材線虫病（松食い虫）でアカマツ林も衰亡している。³⁾

屋敷林は、近世前期まで萱野で、屋敷林の形成は、18世紀（近世中期以降）に薪炭林化し、明治初め頃は、雑木林で、現在はスギ・ヒノキ主体となっている。機能は、北西の季節風のための防風林、下枝は薪、落ち葉は堆肥、樹木は家屋などの材料に利用されてきたが、近年は利用されなくなった。⁴⁾

図1 高倉村の集落構造⁵⁾
Fig. 1 Settlement Structure of Takakura

2 集落の現状と問題・課題

高倉集落は市街化調整区域で、北西の隣接地区では土地地区画整理事業が行われ都市的土地利用に変化している。

(1) 多様な支援による屋敷林や平地林の維持管理

裏山の屋敷林は、高齢化や不在地主等で維持管理されない部分もあり、ゴミの不法投棄なども見られる。近年は、埼玉県「ふるさと緑の景観地」に指定されており、埼玉森林サポータークラブの指導で、地元と協力し中学校前の平地林を管理している。また、市では1999年から「市民の森」整備事業^{注1)}を開始し、土地所有者から樹林地を借りて公開している。飯盛川の上流では一団の樹林地を、第6号市民の森として8.3haを指定し、つるがしま里山サポートクラブ等の協力で、維持管理されつつある。ただし、既に企業用地や資材置き場等に利用されている所もある。

(2) 拠点施設と市民農園での農業関係者と消費者交流

1998年に農業構造改善事業でJAいるま野鶴ヶ島農産物直売所が設けられ、翌年に隣接して農業研修や農産加工などができる農業交流センターと市民農園^{注2)}が整備され、市民と農業の交流を目的とした拠点が開設されている。

(3) 菜の花まつり等による活性化と魅力づくり

1982年には、地元の要望を受けて大規模な土地改良事業が実施され、稲作から畑作への転換が図られた。同時

写真1 高倉集落の全景⁹⁾
Photo. 1 Panorama of Takakura

に都市化の進展による高倉地区の農地の荒廃を憂慮した農家有志によって、「高倉共同作付組合」が組織され、地区の酪農家との耕畜連携により、飼料作物の作付けを開始し、共同作業によって土地の有効利用を図ってきた。しかし、近年は農家の高齢化による遊休農地の増加や酪農家の規模縮小により共同作付地の需要が減少している。

(4) 飯盛川と池尻池

飯盛川上流の市民の森内は、自然のままの小川で水もきれいで景観的に優れている。池尻池は市民の憩いの場の公園となっているが、水質が悪く魚も見られない状態である。池尻池より下流は、コンクリート3面張りの部分や農業基盤整備によるコンクリート壁の水路になっており、水路に降りる所もなく景観的にも問題がある。

ふるさとづくりの会では下流部の畑地沿いに菖蒲や彼岸花などを植えて、魅力ある景観づくりを行っている。

写真2 上流の市民の森内と下流の農地内の飯盛川
Photo. 2 Upper and Lower of Iimori River

(5) 歴史的伝統芸能の保存継承と寺社林の維持管理

高倉には1964年に高倉獅子舞保存会が設立され、江戸時代から続く「獅子舞」の伝統を若い世代に継承している。神社は氏子により維持管理されているが、寺の竹林が荒れている。

Ⅲ 住民によるむらづくりの背景と動機

1975年代に入ると、市の都市化の進行から混住化が進み、ゴミの投棄があちらこちらに見られるようになった。農業の担い手の高齢化や後継者不足も相まって不耕作地の増大、屋敷林の開発、ゴミの投棄など、農業生産環境や生活環境は、一層悪化していった。「このままだと高倉という地名は残っても、“むら”が無くなってしまう」と、高倉の将来を懸念する40歳代の農業者10名が集まり、「鶴ヶ島21どうする会」を1990年に結成した。しかし、会は2000年に解散し、同年7月に『ふるさと高倉の農村景観を守り、育てて生きたい』という思いから、高倉上・下自治会長、農業委員等地元リーダーを含めた「高倉ふるさと研究会」が発足した。研究会からの呼びかけによって高倉土地改良区域内1.5haに飼料作物の裏作と

して菜の花を作付けし、4月には、菜の花と60を超える鯉のぼりが共演する「菜の花まつり」が開催された。

高倉ふるさと研究会では、話し合いやイベント活動を支援することで、研究から実施の段階へ展開することになった。そこで、ふるさとづくりの活動を高倉地区全体で進めるため、2001年4月の自治会総会で、農家だけでなく非農家を含む全ての地区住民から構成される「高倉ふるさとづくりの会」の承認を得た。

この会では、「高倉ふるさとづくり通信」の発行⁶⁾、先進地の視察、「菜の花まつり」や「高倉ふるさとまつり」等のイベント活動にも取り組んできた。2003年には「高倉ふるさとづくり憲章」^{注3)}をつくり、「高倉のみなが喜ぶ」「自然を愛し、自然を活かす」「農業を育み、農地を守る」「高倉の活性化につながる」「獅子舞を始め高倉の文化を守る」等、ふるさとづくりの活動指針を打ち出した。更に、「高倉ふるさとマップ」⁷⁾も作成した。

Ⅳ ワークショップによる将来像づくり

高倉地区は、市民にとっても貴重な緑・自然の空間であり、市の「ふるさとの郷構想」の対象地区に位置づけられている。また、高倉地区は1997年に市が策定した「つるがしま緑のまちづくり計画」の重点プランのひとつとして「雑木林や屋敷林、農地、水辺などが一体となって織りなす鶴ヶ島らしい“ふるさと景観”を次の世代に伝えていく」と位置づけられている。

また、これまでの「高倉ふるさとづくりの会」の様々な農村景観を守り育てる活動を行ってきた成果が認められ、2002年度に前述の豊かなむらづくりの最優良事例として農林水産大臣賞を受賞した際に、「地区の将来像を明確にしきれていないので、それを具体化していき活動することが望まれる」という指摘を受けていた。

このため、市は「高倉ふるさとづくりの会」と話し合い、2004年に「鶴ヶ島市ふるさとの郷構想策定委員会設置要綱」を制定し、住民参加のワークショップによる「ふるさとの郷構想策定委員会」による将来像づくりを行うことになった。

2004年5月に「広報つるがしま」で高倉地区の「ふるさとの郷構想」の策定に向けたワークショップ参加者の公募が行われ、6月から計5回「ふるさとの郷構想策定委員」(14名)と公募で集まった市民(25名)によるワークショップが行われた。それに加えて、3回の「鶴ヶ島市ふるさとの郷構想策定委員会」によって、「鶴ヶ島市ふるさとの郷構想素案」⁸⁾がまとめられた。(表2)

(1) 3つのテーマの概要と提案

ふるさとの郷構想の策定は、市民参加のワークショッ

表2 構想策定委員会の日程
Table 2 Schedule of Plan formulation committee

	開催日程	活動内容
第1回	6月26日	策定委員委嘱式(午前), 基調講演・グループ分けとコース確認(午後)
第2回	7月10日	カントリーウォッチング(午前), ガリバーマップづくり(午後)
第3回	9月4日	問題点・課題点の整理
第4回	9月25日	グループごとに将来像づくり
第5回	10月30日	グループごとに素案づくりのまとめ
第6回	11月20日	ふるさとの郷構想の策定素案まとめ
第7回	12月11日	ふるさとの郷構想の策定素案まとめ

づで進めるに当たり, 1グループの適性人数を10名程度とした。策定期間が半年という時間的制約もあり, 地域の中心テーマとなる「水辺」「屋敷林」「散策路」の3つに絞って行った。

「水辺」班は, 地区内を流れる飯盛川と池尻池などの水辺の環境点検作業を通して, 水辺の活用方法を提案することが目的である。

地区の水辺環境条件から「市民の森を神秘的の森づくり」に「池尻池をロマンの池に」「飯盛川にせせらぎの水辺を復活」の3つのゾーンに分けて提案がされ, 地区全体のキャッチフレーズとして「いやしの水辺(高倉のソナタ)」が提案された。

「屋敷林」班は, 地区の特徴でもある屋敷林の保存の問題について考え, 今後の管理のあり方などを提案することや, 屋敷林に限定せずに高倉地区全体の緑環境について考え, 活用方法などを提案することが目的である。

屋敷林を中心に裏山の現状把握や, 生活井戸や水源, 農地問題など幅広く検討を行い, どのようにしてきれいな裏山を守っていくかが話し合われた。この結果, 地域住民や氏子以外に, NPO埼玉森林サポータークラブ, つるがしま里山サポートクラブ, 地元の中学生・高校生等による様々な市民参画の裏山の手入れ手法が提案された。また, 間伐材を活用した手作りの看板(道の名称, 屋号, 地番, 案内板)などの地域資源活用が, 「未来に残そう屋敷林」として提案された。

「散策路」班は, 上記の資源以外にも存在する様々な地域資源を再発掘し, 活用するために散策コースの設定をすること, また, 休耕作地の活用方法などの提案を行い, 高倉全体の将来像を描くことを目的とした。

地域おこしの素材を探して, “いいに残そう・行こう, 創ろう! 嬉しい! 欲しい! 困った” など問題と課題をうまくまとめた。このまとめから, “歩こう・遊ぼう・学ぼう・働こう・知って・教えて” をキーワードに3つの散策コース, 遊休農地の活用方法や農家レストラン, 直売所の充実, つるの里ののん(農業交流センター)を体験学習・情報基地に, などが, 「行こうヨ歩こうヨ高倉の路」として提案された。

未来につなごう ふるさとの郷 高倉

図2 ふるさとの郷構想⁹⁾

Fig. 2 Concept of Furusato mura

(2) ふるさとの郷構想素案

構想素案の全体的なキャッチフレーズは『未来につなごう ふるさとの郷 高倉』となり, 更に地域外へのアピールとして『自然がいっぱい 行こうヨ歩こうヨ高倉の路』になり, 高倉の内外への期待が込められた。

なお, 3つのテーマに絞った関係で, 全体の構想素案の策定から, 抜け落ちている部分や残された課題もある。また, 具体的な提案まで至っていない内容のものもあり, 更に検討を加えていく必要がある。

(3) ふるさとの郷構想

鶴ヶ島市ふるさとの郷構想策定委員会の構想素案をもとに, 市の構想としてまとめたものが図2の「ふるさとの郷構想」である。⁹⁾

この構想の実現に向けて, 市民が中心として取り組むもの(概ね5年以内), 市が中心となって取り組むもの(概ね10年以内), 市民と市が協力して取り組むもの(概ね10年以内)に, 役割分担と目標年を定めて, 事業展開を図ることとした。

V 特定課題の市民会議

このふるさと構想に基づき, 構想から計画・実施に進めるための具体的な検討を行うために, 2006年度には「高倉ふるさと散策路等の市民会議」, 2007年度には「高

倉ふるさと水辺の整備市民会議」が、公募で集まった市民と高倉住民の参加で開催された。

1 高倉ふるさと散策路等の市民会議

ふるさとの郷構想を実現するため、農業交流センターを拠点とした3つの散策コースの設定及びその整備方法等について、ワークショップ方式の市民会議を行った。

対象者は市民及びふるさとの郷構想に関心のある人である。活動場所は主に農業交流センターで、市民会議は10月～2月に5回開催された。

なお、市民への周知方法は、広報とインターネットで募集し、前回「ふるさとの郷構想素案」作成に協力した人々には案内を送付、高倉ふるさとづくり通信を活用して地元への周知を行った。募集人数は30人程度で、20名の応募者があった。

(1) 散策路のコース設定と整備の課題

市民会議では、既存道路を中心に、水辺・史跡めぐり・ふるさと満喫の3つのコースが設定された。ただし、水辺と史跡めぐりコースの一部では、飯盛川沿いに新たな散策路の整備を前提にコースが設定された。

コースの拠点である農業交流センターに総合案内板を設置する。総合案内板はこの他に3コースの交わる飯盛川付近への設置や、電車で来訪する人に為に一本松駅に設置要望が出された。

高倉地区内には魅力ある地域資源が多くあり、既に市の教育委員会や生活管理課により解説サインが6ヶ所に設置されているが、この他にも由来などを説明する解説サインの設置要望が出された。

散策マップはサイン整備と同時に、立案段階から市民が参加し、活用段階までを考慮して作成やサイン設置場所を考える必要がある。散策マップは地域を紹介するための道具として有効であり、地区以外の人にPRするためには、市役所や駅など高倉地区外で配布することが必要である。

その他の施設整備として、休憩所は、既に拠点となる施設に設けられているが、散策路整備にあたり屋敷林(裏山)内や菜の花畑と飯盛川沿いに、新たな休憩所の整備要望がある。手洗・水飲み場、トイレ、駐車場は、既に主となる施設に設けられており、新たに整備する必要はない。なお、一部、コンビニを借用することを考える。バス停留所は、高倉地区内に市内循環バス(西コース)の停留所が4ヶ所ある。1時間に1本と運行回数は少ないが、疲れた場合の移動に利用される。

地区の農地内では、屋敷林の眺望、富士山や秩父連山の眺望、菜の花畑の眺望など、魅力的な眺望景観がある場所が点在している。今後もこれらの眺望景観を阻害し

ないように保全する必要がある。¹⁰⁾

(2) まち歩き調査によるサイン整備の検証

(i) 調査協力者の選定と調査方法

高倉地区外に住んでいる人を農業交流センターを通じて紹介してもらい、調査協力者を得た。地区外者という条件以外は、特に指定した条件は無い。18名を集める予定であったが、都合上15名のみの参加者となった。

調査方法は、「鶴ヶ島市ふるさとの郷構想素案」で設定された3つの散策コースを対象とし、各コース3人1組のグループを2グループ作り調査した。また、AコースとCコースにおいては未整備部分で歩行不可能な場所があるため迂迴路を設定した。

(ii) サイン整備について

案内サインの必要な場所は、図3に示すように比較的小さいことがわかった。これは各コース曲がり角が少ないということと、高倉地区には高い建物が少なく、視界が開けているため遠くまで見渡せることが関係している。

図3 まち歩き調査によるサインの必要箇所¹¹⁾
Fig. 3 Required number of sign by research walking

表3 案内板の必要箇所数と割合¹¹⁾
Table 3 Required number and rate of sign

コース名	総曲がり角数	案内板が必要と思われる場所	割合 (%)
Aコース	22	8 (0)	36.4 (0.0)
Bコース	7	5 (2)	71.4 (28.6)
Cコース	12	4 (1)	33.3 (8.3)

※カッコ内は2グループの意見が共通した場所の数と割合

各コースの総曲がり角数に対する案内サインが必要であると判断された場所の割合を表3に示した。

Bコースは、総曲がり角数の割に案内サインの数が多く必要であるという結果になっているが、これは市民の森の未整備部分を歩くために、その場所に案内サインが必要であることが原因である。その他のコースでは、案内サインが必要とされている曲がり角は低い割合である。しかし、最低限、今回のまち歩き調査で必要と判断された場所には、案内サインを設ける必要がある。

まち歩き調査の結果には表れていないが、各コースのスタート地点となる農業交流センターに総合案内板を設置する必要がある。また、多くの参加者の意見として、図3に示すように魅力ある地域資源の由来などを説明する解説サインが欲しいという場所があった。

2 高倉ふるさと水辺の整備市民会議

2007年度は、ふるさとの郷構想を計画的に実現するため、池尻池や飯盛川等の水辺の整備方法等について、公募によるワークショップ方式の市民会議を6回、延べ136人もの市民の協力により開催した。¹²⁾

(1) ワークショップの特徴

ワークショップの特徴としては、(i) ワークショップにおいて関係部署からの的確な現状を把握し、具体的な水辺整備方法の検討ができるように、市関連部局の道路建設課、都市計画課、生活環境課の主幹がメンバーとして参加した。(ii) 参加者全員が「高倉」について共通認識を持つことを目的に、高倉ふるさとづくりの会の会長から昔の高倉の姿について話を聞くことからワークショップをスタートさせた。(iii) 効率よくワークショップを進めるため、上班（池尻池から上流域）・下班（池尻池から下流域）の2班に分かれて実施した。(iv) 第2回ワークショップにおいて、水質・流量の確認のための現地調査を実施したことが挙げられる。

(2) 提案及び課題について

主題の「水辺の整備」がいわば「ふるさとの郷構想」の根幹を成す部分であっただけに、議論は水辺にとどまらず市民の森のあり方にまで広がるなど、回を増すごとに白熱していった。その結果として、5回の予定が6回に増えたワークショップが実施されることとなった。

(i) 上流班の提案

市民の森ゾーン内の「飯盛川」は、樹林伐採の行き過ぎを見直し、ゾーン管理的な発想により自然湧水機能・水源涵養能力を高める必要がある。

特に「市民の森」は、全面均質な整備でなくゾーン管理的な手法で、里山としての多様な機能の調和を図る。なお、資材置き場や流通・建設施設等の都市的土地利用

化した部分は、基金による買い取りなどを検討し、里山としての機能を再生する方向とする。

「おかねが井戸」は、落ち葉やヘドロの堆積が見られ浚渫が必要である。また、史跡的な価値を損なわないよう地元の意向を確かめ実行する。

「池尻池」は、ヘドロが堆積しており、一度、浚渫が必要である。都市公園的な機能だけでなく貯水機能、水質浄化機能（水性植物や生き物に優しい）を持たせるため、浄水機能のある水草が生えるゾーンを設ける。北側の一部護岸（現況は松丸太護岸）部分に、抽水植物環境をつくる。

(ii) 下流班の提案

飯盛川の改修案として、A案は現況のままで散策道（1.2m）を設けたもの。B案は板1枚分（30cm）を取り外し、散策道を下げ、水に近づけるようにする。C案は昔のように川を蛇行させて、魚や水生植物が増えるようにする。特定地域を決めて水辺に親しめるようにする。3案共に、地権者との調整は必要だが、A・B案で一部を改良し、第一歩とするのが現実的である。

人を呼びこむ企画や観光を意識した、別の観点で高倉地域の付加価値を増して、後の世代までこの環境と農業が維持できるようにしたい。

水辺に堰を設けて、小魚や昆虫がすめる水辺に整備する。田んぼを復活させ遊水池化したビオトープ化、和田橋の下流には魚がいるので、魚も上がってこられるように魚道をつくるなど、検討する必要がある。

VI 構想の実現化への多様な主体の組織づくり

1 多様な主体による高倉ふるさと協議会を設立

これまでのふるさとの郷構想策定や特定課題の市民会議におけるワークショップの実施過程では、高倉のまちづくり活動を中心に行ってきた「高倉ふるさとづくりの会」や、「NPO法人つるがしま里山サポートクラブ」^{注4)}「鶴ヶ島の自然を守る会」^{注5)}が核を担ってきた。

しかし、今後「ふるさとの郷構想」実現のため、新たに「NPO法人鶴ヶ島市学童保育の会」^{注6)}を加え、また、経済的にも持続可能なふるさとづくりを進める意味で、「いるま野農業協同組合」、新たに商業分野も視野に入れた、より広がりのある組織形態を目指して「株式会社じもとのneco」^{注7)}や「鶴ヶ島市商工会」を含め、「鶴ヶ島市役所」からなる多様な主体の連携と協働による「高倉ふるさと協議会」が2008年7月に設立された。¹³⁾なお、2010年度からは「株式会社地域協働推進機構」^{注8)}を加え、9団体から構成されている。

2 全体会運営方式からプロジェクト方式へ

(1) 2008年度の活動

2008年度は、協議会メンバーによる三島市のグラウンドワークへの視察を行った。更に、協議会では18歳以上の市民1000人を対象にアンケート調査（回答者386人）を実施した。

この結果を踏まえ、「豊かな地域資源を活かしたふるさとづくり」「農」のあるふるさとづくり」「開かれたふるさとづくり」の3つを活動の柱とした。

実践活動は、計画区域100haの生態系調査と高倉を知る講座を3回（延べ60人参加）、麦踏み体験を2回（延べ75人参加）行った。50年後の高倉イラストを作成し、目標の可視化を行った。

(2) 2009年度の活動

協議会による全体会運営では、具体的な作業が進まないため、2009年度の活動方針は、構想から計画の迅速化、専門化を図り、実現への道のりを短縮化する。また、市民、専門家などのメンバーを公募し、多様な連携で推進を可能にした。なお、「できることからやってみよう！」を合い言葉に、①森、②川、③ビオトープ、④小麦、⑤名物料理、⑥特産物、⑦農地活用検討、⑧グリーンツーリズム、⑨ホームページの9つのプロジェクトを立ち上げた。

実践活動として、森プロでは、第6号市民の森について、土地所有者と市が結んだ「市民緑地契約」の範囲内で、よりよい管理と活用のルールを検討し、生態系調査¹⁴⁾、下草刈り、植樹（市有地）などを行った。川プロは、飯盛川の生き物調査、水質調査、清掃を行った。特に生き物調査では8種38匹の魚類を捕獲したので、これを受けて竹でつくった巣箱を設置した。ビオトーププロでは、田んぼビオトープづくりのための候補地調査を行った。小麦・特産物・名物の3つのプロジェクトでは、小麦（農林61号）を使った特産物づくりを目指し、小麦をふるさとまつりで販売したほか、市商工会の「逸品会」による試作品づくりに提供し、高倉菜の花ビール（限定品）などが商品化された。グリーンツーリズムプロでは、山梨県上野原市を視察した。なお、農地活用とホームページの2つのプロジェクトは未実施となった。

(3) 2010年度の活動予定

2010年度は、構成団体に株式会社地域協働推進機構を加え、規約、メンバーの見直しを行う予定である。

活動の充実として各活動へ地域ICTポイント^{注9)}を導入する。

実践活動としては、川プロ：水質検査、生きもの調査、おかねが井戸浚渫、森プロ：植樹、使用・管理ルールつ

くり（ゾーニング）、ビオトーププロ：用地交渉と設計、グリーンツーリズムプロ：機構と連携して実施、小麦プロ：小麦粉、うどん試食会、特産物・名物プロ：試作と練り込みなどを行う予定、なお、農地活用とホームページプロは検討中である。

この他に、今年度から西中学校2年の「環境教育」に協力し、雑木林の管理、竹林の管理、屋敷林の管理、飯盛川の生き物調査・水質調査・清掃など、地域の自然を通じた体験学習を行うことになっている。子供たちに地域にある自然や農業に実際にふれあいながらその大切さを認識させることで、ふるさとの将来を支える人材を育成することができる。

Ⅶ おわりに

(1) これまでの活動の成果

住民参加の「高倉ふるさと郷構想」策定や、その後の特定課題の「散策路等の整備」や「水辺の整備」が、市民会議によって策定されたことは、地元住民と都市住民との協働の成果といえる。また、活動の中から環境団体やリーダー的人材を発掘できた。

ふるさとの郷構想及び特定課題の整備計画を実現化するために、これまでの地域住民、市民、環境団体、行政以外に、「経済的にも持続可能なふるさとづくり」を進める、NPO、企業、商工会等の9団体による農工商連携の多様な主体の「高倉ふるさと協議会」が組織された。

なお、鶴ヶ島市は、高倉地区の農業交流センターを活動拠点とし、産業振興課の事務局を設置し担当者を1名配置して協議会運営を支援している。また、協議会の会議運営にはそれぞれの議題に対する担当部署の職員が参加し連携・支援を図る体制が整った。

(2) 活動上の課題

活動上の課題として、協議会による全体運営では、具体的な作業が進まないため、9つのプロジェクト班を設けて活動を実施している。ただし、計画を実行するための基礎資料（森の状況、水質、生物の状況）の不足や実行部隊（人員）がいないなどの問題もある。

また、参加者の方向性の違いから実践に移行できないプロジェクトもある。

協議会の発足時には、国の農山村地域力発掘支援モデル事業に採択され5年間の補助金を受けることになっていたが、事業仕分けで2年目に廃止となった。このため、2010年度からは、市の単独補助を受けて活動を継続しているが、少ない予算なので今後の予算確保が課題である。

アンケート結果から市民の活動認識率（高倉のふるさとづくりを知る人7%）が低いなどの課題が明らかにな

っており、PR活動などが必要である。

更に、地元のふるさとづくりの会と協議会の違いが課題として出てきた。このため、十分な話し合いを行う中で、計画の見直しとして、現実的な中・長期計画の策定が必要である。

問題や課題が多いが、「できることからやってみよう！」を合言葉に、順次活動を行っている。

注

注1) 鶴ヶ島市では、平成11年度より都市緑地法の市民緑地制度を活用した「市民の森」を開設している。市が土地所有者から樹林地を借りて、市民に公開している。現在7か所・約13.3haが開設されている。

注2) 市民農園は、1.96haで225区画(30㎡167区画、50㎡55区画、100㎡3区画)で、この他に体験農園及び身障者用農園が1区画ある。利用料は年額1㎡4,000円で、センターに貸出用の農機具置場があり、土・日は地元農家の営農指導を受けられる。

注3) 澄んだ空気のもとに広がる農地、連なる屋敷林、ゆるやかに流れる飯盛川。春には花が咲き乱れ、夏には蝉時雨につつまれ、そして秋には獅子舞が奉納されます。これら先人から引き継いだ高倉の自然、文化、景観は私たちの誇りであり、かけがえのない財産です。私たち高倉ふるさとづくりの会は、これらの財産を守り、育み、そして、さらに豊かな生活空間をつくり、次の世代に引き継いでいきます。

注4) 「市民の森」の維持管理を目的に平成14年に組織化。里山の維持保全活動の他、清掃活動やイベントを通じ市民へ自然の大切さを啓発している。正会員21名、賛助会員57名である。

注5) 子どもたちのために少しでも多くの自然を残したいと、観察会、河川清掃、水質調査などを行っている。会員は70名である。

注6) 市内7つの学童保育に在籍する約550人の子どもの放課後保育を行う。子どもの声に耳を傾け、「子どもたちの豊かな放課後を保障する」ために、父母ともどもさまざまな活動を進めている。

注7) 団塊世代に代表されるシニアが集まる企画の運営と場所づくりを通じ、地域の活性化に寄与する他、NPO市民活動の中間支援、ICT(パソコン他)の活用サポートなどを

行っている。

注8) 地域が共感・共鳴・協働する”まちづくりのプラットフォーム”に、「新しい公共空間」の創造にむけて公民連携を推進し、ソーシャルビジネスやコミュニティビジネス等の社会的起業を支援・促進する非営利型のまちづくり会社である。

注9) 地域経済の活性化や地域コミュニティの再生など地域の課題について、ICT(インフォメーション&コミュニケーション、テクノロジー)の利活用を通じてその解決を促進するための取組を委託事業として実施し、地域のユビキタス化(何時でも何処でも意識せずに情報通信技術を利用できる)とICT利活用の普及を図る。

引用・参考文献

- 1) 鶴ヶ島市「鶴ヶ島市21世紀まちづくり計画—交流と連携調和と共存をめざして—」2001年3月。
- 2) 鶴ヶ島町史編さん室編「鶴ヶ島町史 民俗社会編」鶴ヶ島市、pp19 平成4年3月。
- 3) 同上 pp6。
- 4) 同上 pp150。
- 5) 同上 pp43。
- 6) 高倉ふるさとづくりの会「高倉ふるさとづくり通信」第1号～第68号。
- 7) 高倉ふるさとづくりの会「高倉ふるさとマップ」。
- 8) 鶴ヶ島市ふるさとの郷構想市民会議、構想策定委員会「鶴ヶ島市ふるさとの郷構想素案報告書」鶴ヶ島市、2005年3月。
- 9) 鶴ヶ島市農業交流センター編集「鶴ヶ島市ふるさとの郷構想」鶴ヶ島市、2005年3月。
- 10) 鶴ヶ島市高倉ふるさと散策路等の整備市民会議「鶴ヶ島市高倉ふるさと散策路等の整備市民会議報告書」鶴ヶ島市、2007年3月。
- 11) 田中琢也「田園地域における散策路とマップによる地域づくりに関する基礎的研究」明治大学理工学研究科修士論文、2004年3月。
- 12) 鶴ヶ島市高倉ふるさと水辺の整備市民会議「鶴ヶ島市高倉ふるさと水辺の整備市民会議報告書」鶴ヶ島市、2008年3月。
- 13) 鶴ヶ島市「高倉ふるさと協議会(仮称)設立総会資料」。
- 14) 高倉ふるさと協議会ふるさとづくり計画 平成22年度生態調査一報告書一。2010年3月、財団法人埼玉生態系保護協会。

Key Words : 1) Rural Landscape, 2) Preservation and Management, 3) Citizen Participation, 4) Workshop, 5) Musashino Shinden

(2010年4月20日 受付)

(2010年11月8日 受理)